

わかやま母親通信

第102号 2023年3月18日発行

発行 和歌山県母親大会連絡会 事務局 和歌山市小松原通3の20 和歌山県教育会館内
和教組 TEL073-423-2261 FAX073-436-3243 母連メール：w_haharen@wkn.or.jp

生命を生み出す母親は
生命を育て
生命を守ることをのぞみます

HP 和歌山県母親大会

2023年3.8国際女性デー 各地の集会から

ロシアのウクライナ侵略戦争が始まって、丸1年が経ってしまいました。戦争終結の兆しは見え、反対により激しくならないか、心配される状況です。岸田政権は、国民の不安を好機のようにとらえ、軍備拡大の方向へひた走り、物価高やエネルギー不足も、原発再稼働へ利用しています。こんな状況の中で、ジェンダー平等社会への道は、平和あってこそとらえ、軍拡・憲法改悪を許さない運動とともに取り組みました。

3月8日(水)12:15から、和歌山市役所横の和歌山城ホール前で、各自プラスターを持ちスタンディングしました。新婦人県本部の呼びかけに応じたものです。道行く人、車で走る人が目を止めていました。



県下では、田辺市龍神村で手作りちらしを作製して、全戸配布に取り組みました。すでに、3/4(土)に和歌山市集会、有田集会が開催され、2/24(金)には、みなべ町集会、2/25(土)には、海草郡市が、秋にコロナの感染拡大のため取り組めなかった「郡市母親大会を兼ねて、開催しています。それぞれに貴重な学習会になっています。

私たちは、「だまされない」「あきらめない」「立ち止まらない」そして、「しなやかに」「したたかに」「しぶとく」歩み続けます。(詳しくは、2Pに掲載)

明日へ

近70母親学習会 in 彦根 「平和と憲法」分科会の助言者をしていただいたH.M.さん(和歌山県平和委員会)のまとめ発言から(M.I.まとめ)

元教え子から「自衛隊に入った」と年賀状で報告を受け、心配する。「戦場へ行け」と命じる人は行かないで、いつも犠牲になるのは弱者である。正義の戦いなどない。

ウクライナとロシアでは、多くの兵士がなくなっている。兵士の母親の元には正しい情報が入っているとは限らず、戦死したことを知らされていない親もいる。ロシア兵が帰り、「ウクライナにはナチはいなかった」と報告しても信じてもらえない。

第二次世界大戦時も正しい情報は得られなかった。正しい情報がいかに大事かである。情報を知りたいし運動をするためには学習が大事である。「『生命を生み出す母親は生命を守り育てることをのぞむ』という母親大会のスローガンで世界大会をしたい」との意見があったが、きっとロシアの母親とも連帯できる。今こそ母親運動の出番だと思う。

2023年3.8国際女性デー 取り組みのまとめ

集会名/日時/会場	学習会・活動のようす
2023年国際女性デー 和歌山県プレ集会 2/8(水)13:30~15:40 和歌山ビッグ愛9F会場	13名参加。講演は「男女共同参画って何?」と題して、男女共同参画センターのS氏より、センターの役割及び格差の実態等、資料に基づいてお話をいただいた。 その後、参加団体や参加者の意見交流を行った。
 2/24(金) 18:30~ みなべ町公民館 35名	講演は、「ジェンダー平等社会をめざして」と題して、県母連のS.N.さんより、「女性団体や労働組合女性部が果たした役割や日本のジェンダー格差の現状・これからの運動」について話を聞いた。現役世代が17名、男性が2名、参加していた。「興味あるテーマなので聞けて良かった」との声。
はたらく女性の県集会 2/25(土)14:00~16:30 県地評から県文会場・個人へオンライン配信。	講演は、「ジェンダー平等社会をめざして」(録画)と題して、朝倉むつ子氏(早稲田大学名誉教授・OPCEDAWアクション共同代表)のお話だった。ポスト・コロナでの「エッセンシャルワーカーの人権保障」「同一労働に同一賃金を」等。
和歌山市集会 3/4(土)13:30~15:30 和歌山市教育会館 27名参加	講演は、「自由を生き抜く実践知」(第67回日本母親大会田中優子氏の講演)のDVDを視聴。「原稿を見ずに、朗々と話された姿に感銘を受けた」「自民党憲法改正草案の中味がよく分かった」「『男だから女だから』を克服していこう」
有田郡市集会 3/4(土)13:30~15:30 湯浅町地域福祉センター 3/8(水)13:30~ 15名	伊藤宏氏講演「どうしたら戦争しない国になるの?」…とても分かりやすく憲法について話してくれた。48名参加。 湯浅町ユピア前で、ミモザの花と横断幕を持って、ストリートアピール。首相宛要請文。大地震救援募金12,954円
スタンディングアピール 3/8(水)12:15~13:00 和歌山城ホール前 15名参加	各自で用意したプラスターを掲げ、スタンディングアピールをした。道行く人たちが目を止めてくれた。走行する車からちらっと眺める人も。 
龍神地域で、手作りちらし配布行動 (3.8春の行動)	何年かぶりに実行委員会をつくった。教組女性部や地域の行政関係の女性会に声をかけた。教組は半分費用を出してくれた(5名参加)。ちらし500部印刷し、375部紀伊民報に折り込んだ。胸が痛むニュースが続く。仲間を増やそう。
東牟婁郡市集会 3/19(日)13:00~16:00 那智勝浦町体育文化会館 〇名参加	講演は、「自由を生き抜く実践知」(第67回日本母親大会田中優子氏の講演)のDVDを視聴し、おしゃべりカフェ。「各自、知り合いを誘って参加しよう」と、みんなで相談し合っている。

第67回和歌山県母親大会 in 田辺 (6月11日/Big・U)

本日(3/18)第三回県実行委員会を開催しました。ちらし・ポスター・参加協力券を各郡市事務局に渡しましたので、参加を申し込んでください。第⑧⑨⑩分科会は、事前申し込み制です。4月15日以降に、HP「和歌山県母親大会」で用紙をダウンロードできるようにしますので、それまでお待ちください。

尚、申し込み受付は5/9(火)からですので、よろしくお願ひします。

やってみよう！ 無意識の思い込みチェック

国際女性デー関連の学習会などで、使用していただけたらと考え、配布したものです。みんなで、わいわい言いながらやってみるのもいいですね。

無意識の思い込みチェックアンケート

*今時点での意識や価値観を、素直な気持ちで答えてみましょう。

(そう思うの項目に☑をする)

- | | |
|-------------------------------------|-----|
| 1 仕事より育児を優先する男性は仕事へのやる気が低い | () |
| 2 親戚や地域の会合で食事の準備や配膳をするのは女性の役割だ | () |
| 3 女性には理系の進路(学校・職業)は向いていない | () |
| 4 男性は人前で泣くべきではない | () |
| 5 女性には女性らしい感性があるものだ | () |
| 6 組織のリーダーは男性の方が向いている | () |
| 7 女性の上司には抵抗がある | () |
| 8 男性は結婚して家庭を持って一人前だ | () |
| 9 女性は感情的になりやすい | () |
| 10 育児期間中の女性は重要な仕事を担当すべきではない | () |
| 11 男性は仕事をして家計を支えるべきだ | () |
| 12 女性社員の昇格や管理職への登用のための特別な教育・訓練は必要ない | () |



*いくつ☑がつかまりましたか？ あくまでも「素直な気持ち」で。

*いろんな場で、「このチェックシート」を使って、「ジェンダー問題を話題にしてみるのはどうでしょう。今ある意識について「良い・悪い」ではなくて、「根強い社会通念や慣習」「性別役割分担意識」について考えていく糸口や、不合理なことを変える出発になっていけばいいのではないかと思います。

*尚、上記のアンケート項目についての解説は、「わかやま母親通信」103号(4月)に掲載します。

「第69回日本母親大会 in 和歌山」の成功に向けて②

◎和歌山県母親大会のこれまでの歩みと新たな決意 1/3回目 2023.2.18

和歌山県の母親大会は、立上げ当初から和教組婦人部が事務局を持ち、先生と保護者が手をつなぐ運動としてのカラーが強かった。1980年前後の労働運動の右傾化の中で、総評婦人部や日教組婦人部が脱退しても、大きな影響を受けず1,000～1,500名の参加者が続いた。PTA婦人部の中に、「母親大会への参加」が活動項目に入る学校などもあった。全県8郡市で郡市母連、龍神・みなべ・串本など地域母連、職場には職場母親担当ができ、早い時期から7郡市(東牟婁以外)が順に開催地となって県大会ができるようになっていた。(特徴1)

2000年頃までは、学校単位や地域で、県母親大会前に母親懇談会も盛んに開催されていた。全県に大運動実行委員会ができるまでは、母親対県交渉が、みんなの要求を実現していく場であった。(2歳児までの医療費無料化、67歳以上高齢者医療費無料化等)(特徴2) 分科会の話し合いから要求別団体(保育所作り、社会保障問題、障がい者の働く場、不登校/登校拒否・ひきこもりの子どもへのフォローの問題、学童保育所等々)が生まれるきっかけになってきた。



全国的には、主要労働組合がぬけた後は女性団体が中心となる中で、文字通り草の根の要求運動が広がったのだが、その意味では、和歌山県は「労働運動型」が最近まで続いてきたと言えなくはない。(特徴3) しかし、2000年前後から和歌山県でも労働組合加入に陰りが見える中で、新婦人や年金者組合女性部が地域での重要な担い手になって、大会・運動を今日まで支え・けん引する状況になってきている。

この頃、2013年～2014年は、日本母親大会が、これまでの母親運動を総括して、「大会の終了」も選択肢に入れながら、これからの方向を論議していた。和歌山県母親大会も、参加者数が目減りし「マンネリ感」を感じる一面もないとは言えない状態にあった。

2014年第59回県大会 in 和歌山市

現地実行委員会からの要望として、「いろんな加盟団体があるので、団体の運動や要求を中心として、現地が担う分科会を増やしたい。」との意見が出された。

それまでは、親子リズム・見学分科会など2～3だった。→大きな情勢に関わることは県実行委員会で、地域の運動や活動を基盤とした分科会は現地で。結果、16～8分科会の半分は現地が担うことになり、そこに、現地の主体的取組みと地域密着が見えたように思えた。

次回にも、この取り組み方を生かすこととし、最初の実行委員会で「『時代に合った』『時代に求められる』母親大会とは」を提起する形で取り組みを始めた。

(次号に続く)